怖さ

川崎ゆきお

「恐ろしいものは内から来るか、外から来るか」

「恐怖の話ですか」

「得たいが知れないから、恐ろしい。これも一つのルールだ」

「一つですか」

「他にもあるかもしれんからのう」

「確かに訳の分からないものは怖いですねえ」

「動きが読めんからだろうなあ」

「情報不足ということでしょうか」

「まあ、分かっても怖いかもしれん。だから、得体が知れても、まだ怖い。ただ、安心して恐がれるかもしれんがな」

「怖いのに安心ですか」

「全く分からんものよりも怖くはない」

「でも、恐がり様は人によって違うのではありませんか」

「それはある。だから、私の言っているのは、その一つだ」

「幾つあるんでしょうねえ」

「分からん」

「怖いことが怖いというのもあるでしょ」

「普通じゃないのかな」

「そうですねえ」

「次は恐怖は内から来るか外から来るかだ」

「内からって、一人で勝手に恐がっていることですか」

「勝手ではない。やはり理由がある。内側もある意味外側から仕入れてきたものだ。食材や調味料のようなものでな。料理方法もそうかもしれん」

「その喩え、余計に分かりにくいです。それにある意味とか、一つのとかは、逃げ腰ですよ。体の中のことも外側ですか」

「今は、その説明ではない。内からの恐怖は想像するからだろう。頭の中以外は外側だ。脳みそではないぞ。意識や感覚だ。これが内側だ」

「はい」

「想像の方が怖い。どんどん膨らむからな。そして、自分が一番怖いものばかりを注目する。想像する。そういうことだ」

「でも、内からも外からも、両方とも同じようなものじゃないのですか。自分の内も外のように感じることがあります。どれが内なのか、曖昧な気が」

「まあ、思い考える頭は一つだからな。ただ、多少は切り替えておるんだろう」

「切り替える？」

「怖いことを思っているときも、それは思いすぎ、考えすぎだという頭も働く」

「そうですねえ」

「だから、内と外とを厳密に分けんほうがいいのかもしれんなあ」

「要するに怖さは曖昧なのですか」

「闇は怖いが、照らすのも怖い」

「正体を見たくないこともありますねえ」

「それなら闇のままのほうがよいかもしれん」

「なるほど」

「分かったか」

「いえ、まだ闇のままです」

了